

# 保育士養成校における遠隔ピアノ実技指導の報告と検討

## —感染症予防のための授業実践から—

みやざき美栄 山崎めぐみ<sup>1</sup>

### 要旨

保育士養成校に限らず、ピアノ実技指導は対面で行うことが一般的である。2020年は、新型コロナウイルス感染症の影響により、至る所でこれまでの一般的が通用しない未曾有の事態に直面した。本稿では、その事態に対応するために試みた遠隔でのピアノ実技指導の実践報告と、調査結果からその有用性について検討する。

近年、ICT技術の目覚ましい発展に合わせてICT教材のツールも進化し続けている。遠隔ピアノ実技指導は、Googleが提供している教育機関向けのグループウェアツールやソフトウェア・アプリケーションなどが含まれるGsuite for Educationを活用し、主にGoogle Meet、Google Classroomを用いた。

対面ピアノ実技指導での進捗と遠隔ピアノ実技指導での進捗を比較した進捗調査、学生へのアンケート調査を行った結果、本研究方法での遠隔指導が、ある一定の効果があることが分かった。対面指導が困難になった場合、遠隔指導の有用性は大きい。一方、対面・遠隔のそれぞれの実践が、学生個人によって違った影響を与えていることも分かった。どちらが良いというわけではなく、向き・不向きがあると考えられる。対面授業が対応できない未曾有の事態への対応として、実技指導の備えの必要性と、「ICTを併用した対面ピアノ実技指導」を今後のピアノ実技指導の一案として提案した。

### キーワード

遠隔実技指導、ピアノレッスン、新型コロナウイルス、音楽、ICT

### 1. 経緯

2020年春は、日本を含む世界中で新型コロナウイルス感染症の拡大のため、あらゆる現場で感染拡大防止策が検討され、国内における地方でも県内外への移動の自粛などが余儀なくされた。この影響は生活に関するあらゆる現場に及び、教育機関でも教員、学生に多大な影響があった。

筆者らは、2年間の保育士養成校で学生らに保育現場で必要とされるピアノ技術を含む弾き歌いなど、音楽関係の知識や技術を指導する立場にある。保育現場で必要とされる音楽の知識や技術とは、保育所保育指針<sup>1)</sup>、幼稚園教育要領<sup>2)</sup>、幼保連携型認定こども園教育・保育要領<sup>3)</sup>に示されている、主に表現領域の内容や

音楽を介して子どもたちが健やかに育まれるための知識、保育現場で実践するための技術である。手遊びや伝承遊び、音楽あそび、童謡やこどもの歌、音楽劇や合奏、ダンス、そして生活の中での音や音楽の関わりなど、他領域と共有しながら表現領域の中の音楽は保育そのものと密接に関係している。その技術は、歌詞やリズムやメロディーを覚えて実践すること、楽しく伝わりやすく手遊びを実践したり、創作活動をするなど作業も様々で、その扱い方の工夫や表現方法は無限であるが、講義での解説や説明により誰しもが個々で技術をみがいたり、目指す完成形へ個々が工夫して到達することが出来る。しかし、音楽表現の技術の一つであるピアノの技術は、他とは異なる特性を持ち、ピアノ

<sup>1</sup> 鈴鹿大学短期大学部こども学専攻

ノ未経験者が講義の説明を受け、すぐに弾き歌いの技術を習得することは、ほぼ不可能に近い。ピアノ演奏そのものから弾き歌い演奏を含め、初心者においては特に積み重ねを必要とする技術である。松井ら<sup>4)</sup>は、保育学科のピアノの実技指導で、授業外の補講に参加した学生の方が補講に参加しなかった学生より弾ける曲数が多いことを明らかとし、鍵盤楽器未習熟の学生は、早い段階から基礎を習得させる必要があると述べている。

筆者らが所属する保育士養成校の学修期間は基本的に2年間であるが、多くのピアノ初心者を受け入れている。そのため、4月入学時オリエンテーションの一部において、ピアノ技術の特性を伝えると共に、一人ひとりの学生に対してピアノ指導を含む説明を実施することで、教員が学生個人のレベルを把握し、第1回目講義からスムーズにピアノ指導に入れるよう配慮している。

2020年度入学生は、先に述べた新型コロナウイルス感染拡大防止措置のため、入学時点で入学生と教員が対面することは出来ず、全国的にも国立・公立・私立・高等専門学校約9割近くが授業の開始時期を延期された(4月23日時点)<sup>5)</sup>。文部科学省からの通達などにおいても、3月には「面接授業に代えて、遠隔授業を行うことが考えられる」<sup>6)</sup>ことが示唆され、4月には「大学等における新型コロナウイルス感染症の拡大防止措置の実施に際して留意いただきたい事項等について」が周知され、「感染者がいない学校も含めた、地域一斉の臨時休業等の考え方について」の「学校運営上の工夫」において、『遠隔授業を面接授業に相当する教育効果が認められる場合には、法令上可能である』<sup>7)</sup>と明示された。全国の大学でその準備が開始され、遠隔授業の活用に関する検討状況について、多様なメディアの高度な利用などを通じて、教室外の学生に対して行う授業(遠隔授業)の活用については、ほぼ全て(98.7%)の大学等で実施又は検討する方針と発表された。(4月23日時点)<sup>8)</sup>なお5月以降の継続調査で変化はあるが、大きくは変わらなかった<sup>9)</sup><sup>10)</sup><sup>11)</sup>。

以上のような流れにあり、筆者らが所属する保育士養成校でも遠隔授業に向けての準備が開始された。ピアノ実技が含まれる授業の運営について3つの方法を検討した。1つ目は、ピアノ実技の実践に関する内容の

みを対面授業再開まで先に延ばし、先ず楽典など音楽基礎知識を優先させた遠隔授業を開始する方法。2つ目は、楽典など音楽基礎知識とピアノ実技を平行してオンデマンドで実施する方法。3つ目は、楽典など音楽基礎知識はオンデマンドを交えたオンライン、ピアノ実技指導をオンラインで、平行して実施する方法。概ね、以上の3種類である。

学生の「通信環境への配慮」に対する危惧や、「遠隔授業の実施によっては面接授業に相当する教育効果を認めることが困難な授業科目」<sup>12)</sup>に相当する可能性も認めなかったが、学修期間が基本的に2年間であることと、技術習得に時間を要する特性があることを重要視し、学生の学修の保障を最優先させ、学生の通信環境と他教科での通信使用状況がある程度把握した上で、3つ目の、楽典など音楽基礎知識はオンデマンドを交えたオンライン、遠隔ピアノ実技指導をオンラインで実施することとした。

## 2. 課題と目的

近年、生活の中において、予期せぬ事態が起こり得ることは珍しくない。地震、台風、猛暑などの自然災害や今回の感染症拡大などの事態に直面した際、命を最優先することは述べるまでもない。しかし、教育の視点から、物理的な移動は不可能であるが命の確保ができて生活における時間の余裕が存在する場合は、学生らは物理的な移動を必要としなければ学修が可能ということである。教育は、出来る限り学生の学びを継続できるように進めることが理想であろう。可能な限り学習内容を提供し続けられるように態勢を整え、予期せぬ事態に備えておくことは、今後の教育の形として必要となってくるのではないかと。

また、ICT技術の目覚ましい発展に合わせてICT教材のツールも進化し続けている。一方で、ピアノ実技指導は対面で行うことが一般的である。その要因として、機械に頼らない技術であり、繊細な音の聴き分けや筋肉の使い方、脱力の指導、タッチによる繊細な弾き分けの指導が必要であることなどが考えられる。しかし、保育士養成校に求められるその技術は、繊細さよりもリズム感、楽しさ、譜読みの速さ、臨機応変さである。ICT技術を活用して、保育士養成校に求められるその技術を高めることができるのではないかと。

2000年頃から国内においても先行研究がなされており、遠隔ピアノ実技指導が試みられてきた。また、2018年には遠隔ピアノレッスン支援システムの開発<sup>13)</sup>についても報告されている。指導について、2009年深見らは、模倣演奏DVDと併用した形での弾き歌い遠隔・非対面指導を実施しており、助言の内容と合わせて進歩が見られることが明らかとなったとしている<sup>14)</sup>。

教育において、社会に対応していける人材育成は重要な課題の一つであり、ICT技術が目覚ましい進化を続ける中、今後のさらなる進化に対応し続けること、また予期せぬ事態に備えること、そしてより良い遠隔ピアノシステムの開発発展のために、現場での活用や報告は重要であると考えられる。

本稿では、遠隔ピアノ実技指導でのICT利用方法の一案を報告し、対面ピアノ実技指導での進捗と遠隔ピアノ実技指導での進捗を比較した進捗調査結果、そして学生へのアンケート調査の結果から総合的に判断し、保育士養成校に所属する学生にとってのICTを利用した遠隔ピアノ指導の有用性について考察することを目的とする。

### 3. 方法

#### 3.1. 対象

S大学短期大学部保育士養成課程に在籍する41名。内訳は、2019年度入学生16名(2020年度2年生相当)、2020年度入学生25名(2020年度1年生相当)。

#### 3.2. 授業内容・方法

##### 3.2.1 講義の内容

2年間の学修期間において初心者を含む学生らが弾き歌いまで到達するための基本的な授業形態と指導目標を示す。ピアノ実技指導を含む授業内では、楽典(音楽の基礎知識)やソルフェージュ(音楽の基礎訓練)を含むが、本稿ではピアノ実技指導に焦点を絞るため、それらの指導内容については割愛する。

対面におけるピアノ実技指導においては、非常勤助手を含む教員が複数名関わり、グループに分けてグループまたは個人での実技指導を実施している。芸術大学や音楽大学のように十分な時間を確保することは極めて困難であるが、技術向上には個々への対処が必要

であるため、できる限り個人に寄り添える指導を心掛けている。2020年度に実施した遠隔ピアノ実技指導においても、同様にグループに分けたが、指導そのものは個人に対する実技指導とした。詳細は3.2.3遠隔ピアノ実技指導の形態の中で述べる。

なお、講義15回のうち、第8回目と第15回目を基本的に実技発表会としている。

それぞれの指導目標と2年間の学修期間を想定した学修時期を下記に示すが、楽典やソルフェージュの内容も含まれることを付け加えておく。

##### 「音楽Ⅰ(仮題)」 1年前期

- (1)ピアノ奏法の基礎及び読譜力を習得し、ピアノ演奏・弾き歌いに必要な楽典の基礎知識を身につけることができる
- (2)ピアノメロディー奏、または簡単な伴奏でメロディーを階名・歌詞唱しながら弾くことができる
- (3)保育現場などで扱うこどもの歌(季節の歌・生活の歌)を唄うことができる

##### 「音楽Ⅱ(仮題)」 1年後期

- (1)楽譜と鍵盤の位置関係の理解を深め、弾きやすい運指を選択し、曲を仕上げるができる
- (2)リズムパターン・強弱記号やフレーズを学ぶことにより、読譜力を高め、演奏することができる
- (3)童謡・唱歌等の弾き歌い教材を学び、実践することができる

##### 「音楽Ⅲ(仮題)」 2年前期

- (1)ピアノ奏法の基礎技術をより向上させ、表情豊かに演奏できる
- (2)詞の内容を読み取り、フレーズ、プレス、強弱を意識し、弾き歌いすることができる
- (3)保育現場において、こどもに適した音楽を提供することができる

##### 「音楽Ⅳ(仮題)」 2年後期

- (1)ピアノ奏法の基礎技術をより向上させ、曲に合ったテンポ設定で表情豊かに演奏することができる
- (2)楽譜から表現方法を読み取り、フレーズ、プレス、強弱を意識し、詞の内容に合わせた音楽で、こどもたちに歌わせることができる
- (3)保育現場において、こどもに適切且つ生活に結び付いた音楽を即座に提供することができる

### 3.2.2. 教材

ピアノ実技のみの教材について、教則本を用いている。初心者には「標準版バイエル」<sup>15)</sup>を基本とし、筆者らが課題曲を予め選択している。初心者レベルとして1番から44番までの内20曲、初級レベルとして45番から59番までの内14曲、中級レベルとして60番から77番までの内20曲(3種類の音階練習を含む)、上級レベルとして78番から106番までの内30曲(4種類の音階練習を含む)を、順を追って学ぶ。バイエルを終了した学生は自由曲とし、グループのピアノ実技担当者が学生の特徴を把握し、補足または強化したい技術などを見極めて選曲する。ブルグミュラー「25の練習曲 Op.100」や、クレメンティやクーラウなどの作品が含まれる「ソナチネ集」、ギロックの作品などが扱われている。

弾き歌いの教材について、ドレミ出版「こどもの歌ベストテン」<sup>16)</sup>を基本とし、必要と判断される場合に、その他弾き歌い教材を使用する。

### 3.2.3. 遠隔ピアノ実技指導の形態

#### 3.2.3.1. Google Meet の利用

遠隔ピアノ実技指導では学生教員共に、スマートフォンで演奏中の鍵盤を映し出す必要がある。そのため事前準備として、フレキシブルスマートフォンスタンドを学生へ郵送し、取り付け方法のマニュアルを提示した。学生は遠隔授業が始まる前までに、鍵盤に向かって斜め横方向にスタンドを設置し、教員が学生の運指を確認できる程度の撮影環境を整えた。また教員は、学生が教員の模範演奏などの指導状況が理解しやすいように、鍵盤全体を俯瞰的に撮影できるように、クリップ式アームスタンドなど複数の機材を使用し、撮影環境を整えた。その後、遠隔ピアノ実技指導の進め方やGoogle Meetの接続方法について、学生へマニュアルを提示した上、指導担当教員との接続練習日を設け、実際にGoogle Meetの接続を行った。接続練習では、音声や映像の通信環境に問題がないかはもちろんのこと、学生が自分の鍵盤を的確に撮影できているか確認し、スタンドの角度調節などを行った。また、学生が教員の模範演奏を確認するため、スマートフォンの画面切り替えを的確に行えるか確認し指導した。教員側はスマートフォンを自分の上後方に設置し、学生の演奏の運

指確認が困難なため、撮影用のスマートフォンとは別にノートパソコンからもGoogle Meetへ接続し、パソコンをモニターとして使用することで、学生の演奏状況を的確に把握できるように調整した。練習日当日、都合が合わない学生や接続が順調にいかない学生もいたが、後日時間を調整し、最終的に授業開始までに全員と接続練習を行うことができた。このように事前準備を入念に行うことで、遠隔授業開始時のトラブルをできる限り減らし、ピアノ実技指導時間を最大限確保できるように配慮した。なお、指導担当教員ごとにグループに分けてクラスを配置しているが、Google Meetを利用した遠隔ピアノ実技指導では、接続時のトラブルや通信費の負担を減らすため、教員と学生の完全個人指導方式で進めた。

#### 3.2.3.2. Google Classroom の利用

遠隔授業時の授業時間外学修(事前事後学修)の支援策として「合格ルーム」という名称のクラスを立ち上げた。(図1)



図1 合格ルーム(ストリーム)

この合格ルームのクラスは、ピアノ実技指導のグループごとに作成し、授業担当教員複数名とグループ学生がメンバーとして参加した。合格ルームは、学生が授業時間外学修(事前事後学修)にて課題曲の演奏が上

達した場合や、反対に練習に行き詰った場合、この合格ルームのストリームに演奏動画の投稿を行い、その後、教員が投稿された演奏動画を確認し、コメント欄にて、合格や次曲の指示、まだ練習が必要な場合のアドバイスを記入するという流れで利用した。(図1・図2)



図2 投稿動画へのアドバイス

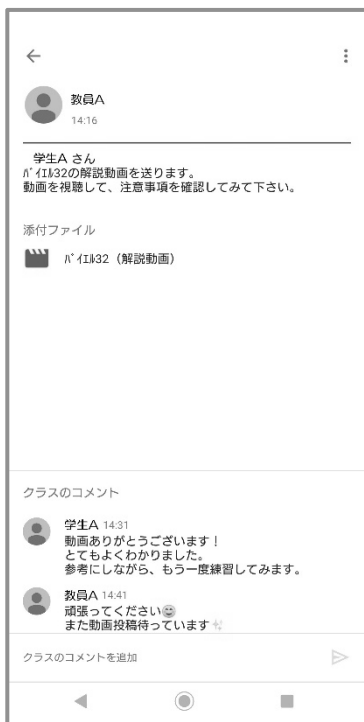


図3 解説動画の配信

さらに、コメントのみでアドバイスを伝えることが難しい際は、教員から解説付き動画を学生へ配信することも可能である(図3)。このような合格ルームにおける学生の動画投稿を採用した背景には、遠隔授業となり在宅時間が増えた学生が、教員と時間の都合を合わせることなく自分の好きなタイミングで動画投稿をし、教員からアドバイスをもらうことができるという利点の他に、本学では通常のピアノ実技指導において、グループ指導方式を採用していたことが大きい。本学のグループ実技指導は、学生のピアノ演奏技術レベルを考慮してグループメンバーを決定し、他メンバーの演奏や教員の指導内容を聴くことができる環境で行うことで、グループメンバーが相互に意識を高め合いながら、自己の課題をさらに明確化し、技術向上に役立てることを目的としている。しかし先に述べたように、遠隔ピアノ実技指導では、完全個人指導方式に進めたため、授業時に他メンバーの演奏を聴く機会が失われることが懸念事項であった。そのため、学生がストリームに動画投稿をした際には、教員だけでなく同クラスの学生メンバーも閲覧可能であるという Google Classroom の特性を活かして、グループ実技指導の効果の代用を求めた。なお、合格ルームへの動画投稿の方法についてもマニュアルを事前に学生に提示し、学生が利用しやすいよう配慮した。

### 3.2.3.3. 対面ピアノ実技指導の形態

対面ピアノ実技指導については、年度により履修者の人数に違いがあるが、指導担当教員1名につき、学生が約6名となるよう配置している。そして、さらに学生を2つのグループに分け、授業時間を半分に区切り交替することで、学生はピアノ実技指導を受ける時間、楽典の受講や自主練習を行う時間を過ごすこととなる。そのため、対面ピアノ実技指導では約3名の学生でグループ実技指導を行い、学生が相互に演奏を聴き合いながら、ピアノ演奏の技術向上を目指している。授業時間外学修(事前事後学修)の支援策については、学生の授業空き時間を利用して、専任教員が補講ピアノ実技指導を行い対応している。なお、2020年度において対面ピアノ実技指導を含む授業が再開された際は、新型コロナウイルス感染拡大対策として、レッスン室を収容定員の半分以下になるよう配置し、ピアノの消毒や

換気を適宜行うことで、遠隔ピアノ実技指導時のような完全個人指導方式ではなく、グループ実技指導を実施した。しかし、授業時間外学修（事前事後学修）の支援策については、新型コロナウイルス感染拡大以前のように、対面補講ピアノ実技指導を行うことは難しく、合格ルームを継続して利用することとした。

### 3.3. 調査方法

#### 3.3.1. 進捗調査の方法および期間

半期15回を前半と後半に2分化し、講義回数7回～8回とした4つの期間6種類を抜粋した（表1）。それぞれの期間の合格曲数合計から、個人の進捗を調査した。合格曲数の参考資料として、学年、時期、講義回数、講義内発表会の有無、遠隔・対面の別、期間内の日数、を把握した（表2）。

期間1（2019年4月11日～2019年5月30日）

学年：2019年度入学生

時期：2019年度前期前半

講義回数：第1回目講義～第7回目講義 7回

発表会：無

遠隔・対面の別：対面

期間内の日数：50日

以降、この期間を【19前前・対面・19入】と示す。

期間2（2019年12月12日～2020年1月23日）

学年：2019年度入学生

時期：2019年度後期後半

講義回数：第9回目講義～第15回目講義 7回

発表会：有（15回目講義時）

※後期前半に実施された学外実習による休校の措置として、1日に2週分（11回目講義、12回目講義として）の講義日を含む（12月26日）。

遠隔・対面の別：対面

期間内の日数：43日

以降、この期間を【19後後・対面・19入】と示す。

期間3（2020年5月14日～2020年6月25日）

学年：2019年度入学生及び2020年度入学生

時期：2020年度前期前半

講義回数：第1回目講義～第7回目講義 7回

発表会：無

遠隔・対面の別：遠隔

期間内の日数：43日

以降、この期間を【20前前・遠隔・19入】または【20前前・遠隔・20入】と示す。

期間4（2020年7月2日～2020年8月20日）

学年：2019年度入学生及び2020年度入学生

時期：2020年度前期後半

講義回数：第8回目講義～第15回目講義 8回

発表会：有（13回目講義時）

遠隔・対面の別：遠隔後の対面

期間内の日数：50日

以降、この期間を【20前後・対面・19入】または【20前後・対面・20入】と示す。

表1 期間と種類

期間	1年	2年
前期前半	【19前前・対面・19入】 【20前前・遠隔・20入】	【20前前・遠隔・19入】
前期後半	【20前後・対面・20入】	【20前後・対面・19入】
後期前半		
後期後半	【19後後・対面・19入】	

表2 抜粋期間詳細

【期間・方法・学年】	検証時の学年	講義回数	講義内発表会の回数	期間内の日数
【19前前・対面・19入】	1	7	0	50
【19後後・対面・19入】	1	7	1	43
【20前前・遠隔・19入】	2	7	0	43
【20前前・遠隔・20入】	1	7	0	43
【20前後・対面・19入】	2	8	1	50
【20前後・対面・20入】	1	8	1	50

#### 3.3.2. Web アンケート調査

対象に対して、2度のWebアンケート調査を実施した。Google ClassroomからGoogle Formsを使用して質問と回収を行い、回答は4件法で行った。

第1回アンケートの回収は39名、95%、第2回アンケートの回収は32名、78%であった。

### 3.3.2.1. 内容

アンケート調査内容は、「遠隔レッスンに向けた準備は難しかった」「遠隔レッスンは受講しにくかった」「遠隔レッスンより対面レッスンの方が良い」「遠隔レッスンでピアノが上達すると思う」の4つの質問とした。

### 3.3.2.2. 期間

下記の期間で実施した。

第1回アンケート：2020年5月13日－5月14日

第2回アンケート：2020年8月20日－8月31日

## 3.4. 分析方法

### 3.4.1. 進捗調査

各期間・学年別合格曲数の平均を算出した。

また、19年度入学生(対面)及び20年度入学生(遠隔)の【前期前半】における合格曲数の比較について、ノンパラメトリック検定のマン・ホイットニの順位検定を行った。例年1年次前期間全体で20曲以上の合格を指標としているため、その半期間として半数10曲を基準として設定し、合格曲の数を10曲以下の群と10曲以上の群で比較した。有意水準は5%未満とした。

また、2019年度入学生のうち6名を抽出し、1年次【前期前半】から2年次【前期後半】のうち抜粋した4期間の合格曲数及び進捗の推移を示した。

### 3.4.2. Web アンケート調査

遠隔実技指導の開始時と前期授業の終了時におけるWeb 調査の4項目の結果の比較について、ノンパラメトリック検定のマン・ホイットニの順位検定を行った。有意水準は5%未満とした。

## 3.5. 倫理的配慮

調査を行うに際し、対象者に対して調査の意義と人権的配慮に関して文書による説明を行った。アンケート実施やデータ抽出にあたっては個人情報の保護が確保されることを説明し、これらについて拒否できることを伝えると共に拒否方法を提示し、拒否しても不利益を受けることがないことを明記した。

## 4. 結果

### 4.1. 進捗調査

抜粋した4期間の合格曲数の合計平均を表3に示す。

表3 各期間の合格曲数の平均

【期間・方法・学年】	検証時の学年	講義回数	講義内発表会の回数	期間内の日数	合格曲数の平均
【19前前・対面・19入】	1	7	0	50	22.0
【19後後・対面・19入】	1	7	1	43	10.4
【20前前・遠隔・19入】	2	7	0	43	14.7
【20前前・遠隔・20入】	1	7	0	43	17.7
【20前後・対面・19入】	2	8	1	50	9.5
【20前後・対面・20入】	1	8	1	50	13.1

最大で22.0曲、最小で9.5曲であった。最大は1年次前期前半、対面期間である。最小は2年次前期後半、遠隔後の対面期間である。両学年において合格曲数が最も多い期間は、1年次前期前半であった。

1年次前期前半における最高合格曲数は41曲と42曲で両学年とも非常に多かったが、2020年度入学生対面(【20前後】)の最低合格曲数が8曲であるのに対し、遠隔(【20前前】)では2曲に留まった学生が存在した。19年度入学生の同時期、対面(【19前前】)の最低合格曲数も8曲であった(添付無し)。

【前期前半】対面と遠隔の合格曲の差を、表4に示す。

表4 【前期前半】対面と遠隔の合格曲の差

	10曲以下	11曲以上	合計	有意差検定
【19前前・対面・19入】	(人) 1 (割合) 6%	15 94%	16 100%	
【20前前・遠隔・20入】	(人) 9 (割合) 36%	16 64%	25 100%	n.s.
合計	(人) 10 (割合) 24%	31 76%	41 100%	

n.s. : not significant

両学年の1年前期前半(対面・遠隔)において、有意差は認められなかったが、合格曲10曲以下の数に開きがあり、対面では1名、遠隔では9名であった(表4)。

【20前前・遠隔・19入】の最低合格曲数は4曲で、10曲以下の人数は6名であった(添付なし)。

表5は、4期間の推移である。Aの2名は、対面の期間は平均以下の合格曲数だが、遠隔の期間に曲数を伸

表5 2019年度入学生推移

	【期間・方法・学年】	進捗		合格曲数								
		バイエル		授業内			対面補講または合格ルーム			合計	学年平均	
		出発番号	到達番号	バイエル	自由曲	弾き歌い	バイエル	自由曲	弾き歌い	(曲)	合計(曲)	
A1	【19前前・対面・19入】	ニ長調	83	11	0	0	0	0	0	11	22.0	
	【19後後・対面・19入】		96	101	3	0	3	0	0	6	10.4	
	【20前前・遠隔・19入】		99	104	3	0	6	1	0	9	14.7	
	【20前後・対面・19入】	終了			0	1	8	0	0	1	10	9.5
A2	【19前前・対面・19入】		64	75	13	0	0	0	0	13	22.0	
	【19後後・対面・19入】		85	88	3	0	6	0	0	9	10.4	
	【20前前・遠隔・19入】	ニ長調	87		3	0	10	1	0	7	21	14.7
	【20前後・対面・19入】		91	92	2	0	7	0	0	9	9.5	
B1	【19前前・対面・19入】		3	31	10	0	0	9	0	19	22.0	
	【19後後・対面・19入】		55	60	3	0	3	2	0	2	10	10.4
	【20前前・遠隔・19入】		61	62	2	0	2	0	0	4	14.7	
	【20前後・対面・19入】		63	66	4	0	5	0	0	9	9.5	
B2	【19前前・対面・19入】		3	45	12	0	0	15	0	27	22.0	
	【19後後・対面・19入】	ト長調	62		2	0	1	6	0	3	12	10.4
	【20前前・遠隔・19入】		70	71	1	0	3	1	0	1	6	14.7
	【20前後・対面・19入】		72	72	1	0	5	0	0	4	10	9.5
C1	【19前前・対面・19入】		50	80	28	0	0	0	0	28	22.0	
	【19後後・対面・19入】		101	104	3	1	4	0	2	4	14	10.4
	【20前前・遠隔・19入】	終了			0	3	8	0	1	5	17	14.7
	【20前後・対面・19入】				0	0	5	0	3	2	10	9.5
C2	【19前前・対面・19入】		12	56	23	0	0	6	0	29	22.0	
	【19後後・対面・19入】	ニ長調		80	5	0	3	1	0	1	10	10.4
	【20前前・遠隔・19入】		79	83	3	0	6	2	0	3	14	14.7
	【20前後・対面・19入】		84	90	6	0	5	0	0	2	13	9.5

ばしている。対面の期間に補講での合格が0であるが、遠隔の期間には合格ルームの使用があることがわかる。それに対して、Bの2名は、対面の期間は平均前後の合格曲数だが、遠隔の期間に著しく合格曲数が落ちている。対面の期間には補講での合格曲数があるが、遠隔の期間に合格ルームの合格曲数がない。Cの2名は、4期間通して平均前後から平均以上を保つことができている。対面補講と合格ルームの使用について、どちらの使用も確認できる。

入学時のバイエルの開始番号は、担当教員が学生の素養と資質を判断して決定する。Bの2名は、入学当初のバイエル出発番号が一桁であり、超初心者としてピアノを始めていることがわかる。Aの2名とC1の3名はある程度の経験がある。C2は、Bの2名と同様、初心者の番号である。しかし、初回指導の段階である程度の資質を認め、12の番号からスタートしている。C2の合格曲数は4期間において安定しているが、遠隔での合格曲数は、若干低い数値である。

#### 4.2. Web アンケート調査

2回の調査は、遠隔実技指導の開始時、そして遠隔実技指導と対面実技指導を経験した前期授業終了時の実施である。(図4・5・6・7,表6・7・8・9)

「遠隔レッスンに向けての準備は難しかった」は、遠隔ピアノ実技指導の開始前は、8割近くの学生が「そう思う」の群であったのに対し、終了時は4割近くとなり全体的に変化を確認することができる。有意差においても認められた。

「遠隔レッスンは、受講しにくかった」では、遠隔指導初日(開始時)には6割近くの学生が「そう思う」の群であったのに対し、終了時は4割以下に減少した。有意差は認められなかった。

「遠隔授業より対面レッスンの方が良い」と開始時に感じた学生は、「とてもそう思う」が半数以上、「まあそう思う」も含めると、「そう思う」群が9割近くを占める結果であった。終了時には、「とてもそう思う」は4割ほどにやや緩和されたが、「まあそう思う」を含



む「そう思う」群の割合に大きな変化は見られない。

「遠隔レッスンでピアノが上達すると思う」では、開始前は「とてもそう思う」と感じられた学生は1割以下であったが終了時には2割近くになり、2倍の学生が「とてもそう思う」を選択した。しかし、「まあそう思う」を含むと、「そう思う」群が開始前に66.7%であったのが、62.4%に減少している。

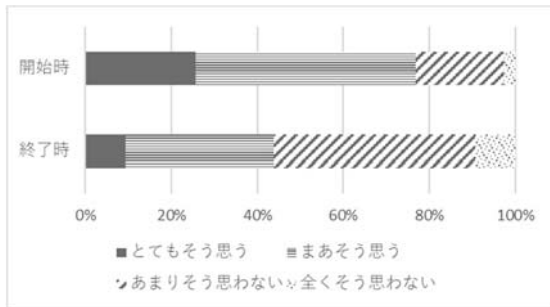


図4 遠隔レッスンに向けた準備は難しかった

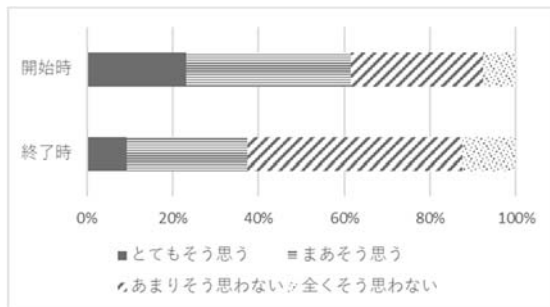


図5 遠隔レッスンは、受講しにくかった

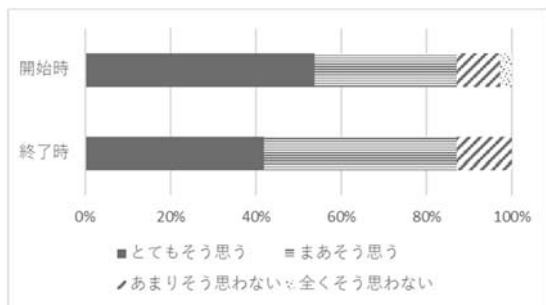


図6 遠隔レッスンより、対面レッスンの方が良い

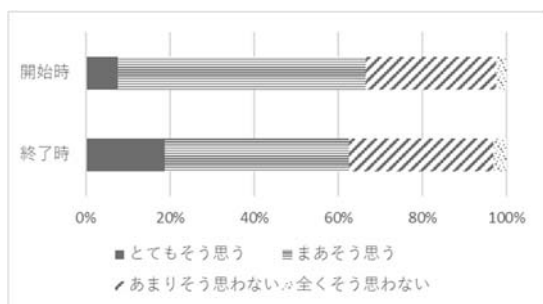


図7 遠隔レッスンでピアノが上達すると思う

表6 遠隔レッスン開始に向けた準備は難しかった

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計	有意差検定
開始時	(人) 10 (割合) 25.6%	20 51.3%	8 20.5%	1 2.6%	39 100.0%	
終了時	(人) 3 (割合) 9.4%	11 34.4%	15 46.9%	3 9.4%	32 100.0%	**
合計	(人) 13 (割合) 18.3%	31 43.7%	23 32.4%	4 5.6%	71 100.0%	

\*\* :  $p < 0.01$

表7 遠隔レッスンは、受講しにくかった

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計	有意差検定
開始時	(人) 9 (割合) 23.1%	15 38.5%	12 30.8%	3 7.7%	39 100.0%	
終了時	(人) 3 (割合) 9.4%	9 28.1%	16 50.0%	4 12.5%	32 100.0%	n.s.
合計	(人) 12 (割合) 16.9%	24 33.8%	28 39.4%	7 9.9%	71 100.0%	

n.s. : not significant

表8 遠隔レッスンより、対面レッスンの方が良い

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計	有意差検定
開始時	(人) 21 (割合) 53.8%	13 33.3%	4 10.3%	1 2.6%	39 100.0%	
終了時	(人) 13 (割合) 40.6%	14 43.8%	5 15.6%	0 0.0%	32 100.0%	n.s.
合計	(人) 34 (割合) 47.9%	27 38.0%	9 12.7%	1 1.4%	71 100.0%	

n.s. : not significant

表9 遠隔レッスンでピアノが上達すると思う

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計	有意差検定
開始時	(人) 3 (割合) 7.7%	23 59.0%	12 30.8%	1 2.6%	39 100.0%	
終了時	(人) 6 (割合) 18.8%	14 43.8%	11 34.4%	1 3.1%	32 100.0%	n.s.
合計	(人) 9 (割合) 12.7%	37 52.1%	23 32.4%	2 2.8%	71 100.0%	

n.s. : not significant

## 5. 考察と検討

### 5.1. 進捗調査

#### 5.1.1. 合格曲数に影響を与えると考えられる遠隔・対面の事由以外の事項

##### 5.1.1.1. 実習の影響

災害などの影響を受けなかった場合、2年間の間に5回の実習経験をjする（保育士資格、幼稚園教諭2免許状に限る）。実習の時期は、1年次に保育実習Ⅰ（保育所）2週間、幼稚園教育実習Ⅰが2週間及び保育実習Ⅰ（施設）が10日間、2年次に保育実習Ⅱが2週間、幼稚園教育実習Ⅱが2週間である。2020年度においては、前期8月までにおいて新型コロナウイルス感染症予防から、実習を実施せず延期措置をとった。今回の調査に関わる事項としては、【20前前・遠隔・19入及び20入】【20前後・対面・19入及び20入】【19前前・対面・19入】の期間内において、実習の期間外または延期のため実習に関わる補講を含む影響が少なかった。【19後後・対面・19入】においては、期間直前の実習による休校の補講措置を補講期間中に1日にまとめて2週分を実施せざるを得なかったため、毎週1回の実技指導のペースが崩れてしまっていたことを記しておく。また、【20前後・対面・19入】においては、9月に実習が実施されたため、その準備（弾き歌い課題）に取り掛かる期間であった。いずれも、合格曲数に影響があったと考えられる。

##### 5.1.1.2. 取り組む楽曲（課題）

3章、講義の内容において、「音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の目標を提示した。全くピアノ経験がなかった学生らも含め、2年間である程度の弾き歌いが出来るようになるが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳそれぞれの段階において目標や取り組む楽曲（課題）も変化していく。使用教材についても前述の通り、Ⅰでは主にピアノ奏法の基礎及び読譜力を付けることを目標とし、歌詞は無くピアノ演奏のコツを要領良く掴むためピアノのみの曲を課題としている。Ⅱでは童謡・唱歌等の弾き歌いを学び、実践することを目指しているため、歌（旋律を伴う言葉）を付け加えることが必須である。実習に備えることと、Ⅱが終了した時点で短期大学部での学修期間の折り返し地点終えることとなるため、現場での実践に備え、弾き歌いに慣れていくことがねらいである。ピアノの技術が

追いついていない場合でも、簡易伴奏を取り入れるなどして、弾き歌いを必ず実践する。弾き歌いは、弾くことと歌うことを同時に行うことであるが、初心者にとっては非常に難しい技術である。このように、段階によって取り組む課題が変化するが、特に音楽Ⅰ（1年生【前前】及び【前後】）の内容と比較すると、音楽Ⅱ（1年生【後後】）では急激な変化があり、1曲に要する時間が増加傾向にあるため、合格曲数に影響が出ている可能性は否定できない。

##### 5.1.1.3. その他の事項

1年前期前半の期間（【19前前・対面・19入】【20前前・遠隔・20入】）は、初心者は基礎を徹底して習得しなければならない期間である。基礎習得には、楽譜を読みなれる必要があるため、無理のないレベルの曲で出来る限り沢山の課題に触れる必要がある。また、経験者においても、個人の実力より少し遡った番号から指導を開始する。保育士養成校ならではの技術の習得のため、復習期間として学びなおしを行うと共に、特有の技術習得の方向性を身に付けるためである。よって、1年前期前半の期間（【19前前・対面・19入】【20前前・遠隔・20入】）は、合格曲が多い傾向にある。

### 5.1.2. 進捗調査から

同時期の比較として、前期前半の各種類の合格曲の合計を比較する。【19前前・対面・19入】22.0曲、【20前前・遠隔・19入】14.7曲、【20前前・遠隔・20入】17.7曲であった。【19前前・対面・19入】において、期間内の日数が1週間ほど多かったが（表3）、それを考慮しても、平均値の差があると判断する。

まず、時期を同じくし【20前前・遠隔・20入】と【19前前・対面・19入】を比較する。両学年共に最高合格曲数が41曲と42曲で多かったが、最低合格曲数は【遠隔】で2曲に対し、【対面】で8曲であった。対象を同じくし、直後の期間である【20前後・対面・20入】では最低合格曲数は8曲に増加した。また、10曲以下の人数を算出した結果においても、【20前前・遠隔・20入】では、9名36%であったのに対し、【19前前・対面・19入】1名6%であった。

次に、対象者を同じくし【19前前・対面・19入】に

対して、【20 前前・遠隔・19 入】と比較する。最低合格曲数は【対面】で8曲に対し、【遠隔】では4曲に減少した。10曲以下合格者については、【対面】1名6%に対して、6名38%であった。

時期及び対象を同じくして比較したどちらにおいても、遠隔時に、最低合格曲数が減少し、10曲以下の合格者数が増加していることが分かった。最高合格曲数には、差は確認されなかったため、合格曲数の少ない群が、平均値に影響を与えている可能性がある。これについて、何かしらの原因があると考えられる。

経緯で触れた先行研究の結果の通り、保育学科のピアノの実技指導で、授業外の補講に参加した学生の方が補講に参加しなかった学生より弾ける曲数が多いことを明らかとされている<sup>14)</sup>。この補講の扱いが焦点になることが考えられる。本研究では遠隔期間での、授業外補講の措置（対面での授業事前事後学習の補講措置）として、Google Classroomを用いた「合格ルーム」とした。

2019年度入学生の推移を、バイエルの進捗と共に、合格曲数を授業内と対面補講または合格ルームに分けて辿り、対面補講と合格ルームの使用について確認する（表5）。Aの2名は対面補講の合格曲が無く、Bの2名は補講で授業と同等またはそれ以上の曲数を合格している。遠隔で合格ルームになると、それが逆転する。Aの2名はそれまで対面補講の必要を感じることなく受けなかったため合格曲数が少なかったが、遠隔で合格ルームに投稿することにより曲数を伸ばすことが出来ている。一方、対面補講の必要性を感じ、授業外に率先して補講を受講していたBの2名は合格ルームでは、1曲も合格することができなかった。授業時の合格のみでしか、進めなかったということになる。結果の表から読み取れるAとBの差は、入学時のバイエルの出発番号にある。Aの2名は明らかに経験者で上級または中級レベルからスタートしている。Bの2名は3番からとなっており、超初心者である。前述したが、入学時のバイエルの開始番号は、担当教員が学生の素養と資質を判断して決定する。初心者であっても、C2のように12番からスタートする場合もある。初心者として入学したメンバーの一部が、合格ルームを使用するにあたり、何かしらの支障があったのではないかと考えられる。

対面補講と合格ルームの大きな違いは、弾き始めすぐに（例えば1小節目であっても）教員が指導できる体制が対面補講であり、自身が納得のいく形で自身の演奏を録画及び投稿し、教員の指導を待つのが合格ルームである。初心者の群において、補講措置としての合格ルームへの投稿が、難しかった可能性がある。本研究の資料にはしなかったが、合格ルームとは別に Google Meet を使用した補講も学生らに提示したところ、これに申し込んだ学生はわずかであった。

この2019年度入学生の推移から、2020年度入学生の前期前半（【20 前前・遠隔・20 入】）において、合格曲数が少ない群が存在した背景には、一からスタートする初心者において、まだ知識と技術がほぼ身につけていない段階での遠隔ピアノ実技指導は難しかったと考えざるを得ない。

一方、経験者にとっては、遠隔の期間に合格曲数を伸ばしている学生が見られ、個人のペースで進歩出来ることが明らかとなった。これまで、学内での時間を費やし補講に足を運ばなければならなかったのが、自宅で練習した際に動画を撮影し、そのまま投稿するということが、合格ルームのグループ内で日常的に聴きあえるという利点も含み、刺激を受け合って相乗効果となったと考えられる。

遠隔ピアノ実技指導は、学生の特性や知識及び技術の進捗に関係して、向き・不向きがあると考えられる。

## 5.2. Web アンケート調査

4つの質問の内、遠隔授業初日と、7回の遠隔授業とその後の対面授業を経験した後の学生の意識の変化について、有意差が認められたのは「遠隔レッスンに向けた準備は難しかった」のみであった（表6）。

準備については遠隔指導を重ねることによって慣れることが出来、難しさが軽減されていくことが分かった。しかし、43.8%の学生が授業後も「そう思う」群にあり、困難が無いとは言えないだろう。そして、有意差は認められなかったが、遠隔レッスンが受講しにくいと考えていた学生の2割以上に、「そう思う」群の減少が確認できたことは、この項目についても遠隔指導を重ねることによって、ある程度慣れることが出来るのではないか（図5、表7）。今後検証を重ねたい。

実技指導に関する質問「遠隔レッスンより、対面レッスンの方が良い」「遠隔レッスンでピアノが上達すると思う」については、有意差が認められなかっただけでなく、「そう思う」群と「そう思わない」群と比較した際、意識の変化もほぼ認められなかった(図6, 図7)。「対面レッスンが良い」とする学生が、遠隔授業後でも圧倒的に多く84.4%が「そう思う」群(表8)にある一方で、「遠隔レッスンでピアノが上達すると思う」で「そう思う」群にある学生も62.6%(表9)と半数以上であった。学生らは対面指導を望む一方で、遠隔ピアノ指導の実施にも、ある一定の評価をしており、遠隔の可能性を実感できていると考える。

## 6. まとめと今後の実技指導についての検討

2つの調査結果から、保育士養成校におけるピアノ実技指導において、本研究方法での遠隔指導がある一定の効果があることが分かった。対面指導が困難になった場合、その有用性は大きいにある。一方、対面・遠隔のそれぞれの実施が、学生個人によって違った影響を与えていることが分かった。どちらが良いというわけではなく、向き・不向きがあると考えられる。

今後の授業について、現時点において対面を希望する学生の割合が非常に多かったことは重要視する必要があるだろう。本研究の経緯からの課題であった未曾有の災害時の授業の備えについて、備えは十分に可能で、その際に学生の特質を把握しておくことが、より良い遠隔ピアノ指導のために必要であることが明らかとなった。また、遠隔指導に向いている学生に対する配慮として、対面指導の期間でも、ICTを併用して活用することがさらに学びを進められることに繋がると考え、「ICTを併用した対面ピアノ実技指導」を今後のピアノ実技指導の一案として提案する。ICTが補助的な役割を担い、良い働きをするのではないか。今後の課題としたい。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省(2017): 保育所保育指針, フレーベル館, 東京, 1-39.
- 2) 文部科学省(2018): 幼稚園教育要領, フレーベル館, 東京, 1-27.

3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省(2017): 幼保連携型認定こども園教育・保育要領, フレーベル館, 東京, 1-39.

4) 松井 みさ, 土谷 由美子, 大山 佐知子(2017): 中国短期大学保育学科における鍵盤楽器未経験者に対する演奏技術向上の為の取り組み(3)「幼児音楽」での授業到達度をふまえて, 中国学園紀要, 16, 23-30

5) 文部科学省(2020)「令和2年度における大学等の授業の開始等について」(令和2年3月24日 日本文科高第1259号)

[https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt\\_kouhou01-000004520\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf)(最終アクセス2020年9月25日)

6) 文部科学省(2020) 大学等における新型コロナウイルス感染症の拡大防止措置の実施に際して留意いただきたい事項等について(周知)

[https://www.mext.go.jp/content/20200420-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200420-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)(最終アクセス2020年9月25日)

7) 文部科学省(2020) 遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取扱い等について

[https://www.mext.go.jp/content/20200501-mxt\\_kouhou02-000004520\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200501-mxt_kouhou02-000004520_3.pdf)(最終アクセス2020年9月25日)

8) 文部科学省(2020): 新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について(令和2年4月23日)[https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt\\_kouhou01-000004520\\_10.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000004520_10.pdf)(最終アクセス2020年9月25日)(最終アクセス2020年9月25日)

9) 文部科学省(2020) 新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について(令和2年5月13日)[https://www.mext.go.jp/content/20200513-mxt\\_kouhou01-000004520\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200513-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf)(最終アクセス2020年9月25日)

10) 文部科学省(2020) 新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について(令和2年5月27日)

[https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt\\_kouhou01-000004520\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf)(最終アクセス2020年9月25日)

1 1) 文部科学省 (2020) 新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について (令和2年6月5日) [https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt\\_kouhou01-000004520\\_6.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_6.pdf) (最終アクセス 2020年9月25日)

1 2) 文部科学省 (2020) 大学等における遠隔授業の実施に当たっての学生の通信環境への配慮等について (通知) (令和2年4月6日2文科高第36号) [https://www.mext.go.jp/content/20200407-mxt\\_kouhou01-000004520\\_5\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200407-mxt_kouhou01-000004520_5_1.pdf) (最終アクセス 2020年9月25日)

1 3) 松井 遼太, 竹川 佳成, 平田 圭二 (2018): Tel-Gerich: 共同注視およびカメラスイッチングに着目した遠隔ピアノレッスン支援システム, ヒューマンインタフェース学会論文誌, 20, 3, 321-332. DOI: [https://doi.org/10.11184/his.20.3\\_321](https://doi.org/10.11184/his.20.3_321)

1 4) 深見友紀子, 赤羽美希, 中平勝子 (2009): ピアノ弾き歌いにおける遠隔・非対面指導の効果と課題, 京都女子大学発達教育学部紀要, 5, 31-40

1 5) Ferdinand Beyer (1955): *Vorschule im Klavierspiel Op. 101* 標準バイエルピアノ教則本, 東京, 全音楽譜出版社, 1-95

1 6) 坂東貴余子 (2018): こどもの歌ベストテン, 東京, ドレミ楽譜出版社, 1-150

#### 代表執筆者の所属と連絡先

鈴鹿大学短期大学部こども学専攻

Email: [m-miyazaki@suzuka.ac.jp](mailto:m-miyazaki@suzuka.ac.jp)

# Report and Examination of Remote Piano Lessons in a Training Course for Nursery Teachers

—From Practices for Infection Prevention—

Mie MIYAZAKI , Megumi YAMAZAKI

## Abstract

Face-to-face piano lessons are the usual way of teaching. In 2020, an unprecedented situation was experienced due to covid-19. In this paper, practical reports and survey results for of remote piano lesson will be analysed.

In recent years, the tools for ICT teaching materials have evolved in line with the remarkable development of ICT technology. Remote piano lessons utilized G suite for Education, includes groupware tools and software applications for educational institutions provided by Google. In this teacher training program Google Classroom and Google Meet were primarily used. A progress survey was conducted, comparing the progress of face-to-face piano lessons and the progress of remote piano lessons, a with student questionnaire survey.

It was concluded that further piano lesson preparations must be made for future unprecedented crisis situations using ICT.

## Keywords

Remote practical training, Piano Lessons, Covid-19, Music, ICT